

## 惹かれた言葉



江別医師会  
おおぬま小児科

大 沼 正 和

「個人とは社会的諸関係の総体（アンサンブル）である」

その昔、「アンサンブルステレオ」というものがあった。木目調、家具調のしつらえで、二個のスピーカーボックスとその間にレコードプレーヤーとかアンプとかFMチューナーなどが組み込まれたボックスからなる一体型のものである。

音を出すためには、各々が他のものと関係しあう必要がある。その前に各々が必ずある役割を担う「物」に置き換えられていなければならないのであろう。

「個人と社会を対立するものとして捉えてはならない」

その昔、「野球は個人競技である」と言われたことがある。確かに野球は、サッカーとかラグビーと比べると試合中に「個人的な時間」がより多く取れるような気もする。しかし、野球の試合において、一人ひとりの選手は守備位置とか作戦上での打順の違いはあっても、両チームのその時々諸事情を考慮して立ち振る舞っているのであろう。ここでもやはり、アンサンブルの観点が役に立ちそうである。

「そのとき、僕は二十歳だった。それが人生でもっとも美しいときだなんて誰にも言わせない」

これを読んだのは、私が二十歳の時であった。51年と少し前のことである。

まだ医学部ではなく理学部にいたその頃は、思った通りに行動に移すことができたように思う。ちょうど大学紛争の真っただ中で、「理学」を学んだ記憶はあまり残っていない。それよりも「文学」や「哲学」に惹かれていたように思う。デモとかバリケード封鎖とかの毎日の中で、何故か「『お上』を奉り、それ以外の生き方は許さないという人たち、根拠も無しに威張る人たちと自分さえ良ければそれでいいという人たちは許せない！」と怒っていたような気がする。

「他者は上下ではなく、対等として捉えよ」

当時の理学部では、実験器具など「欲しいものがあれば買えばいいじゃないか」とはなかなかいかなかった。自分たちで工夫して代用品を作ったりして

いた。2リットル入る大きなビール瓶の真ん中あたりを綺麗に輪切りにしたこともあった。試験管なども自分で作ることを試みたが満足のいくような物は作れなかった気がする。それでも、自分の頭で考えること、反省して再度試みることの大切さを教えられたように思う。「ガラス細工の職人さんたち」にはいろいろとお世話になった。縁の下の力持ちの職人さんたちの支えがあって初めて「研究」が成り立つのであろう。そう考えると、「自分たちは、頭脳労働者だから偉い」という発想は捨ててしまった方が良いと思われた。あるのは「分業」ということだけなのかもしれない。

「あらゆる主義は反動である」

そんな当時、ひとりの先生がそうおっしゃっていたことを今でも鮮明に思い出すことがある。その先生は、私たちが卒業する時の「追い出しコンパ」で「君たちのように何でもかんでも権威というものに盾を突くような生き方をしていいたら、いつどこで野垂れ死にするか分からないから、今のうちに「お経」をあげておいてあげる」と言って、朗々と読経してくださった。

その先生は、自身の生きて来られた過程で、「大学などに残存しているような日本型の古い封建主義」を打ち壊したいと願ってきたのだと思う。「しがらみ」に囚われない「新しい人たち」の出現を待ち望んでいたのだと思う。私たちがそれに応えるような者たちであると感じて嬉しかったのであろうと私は勝手に思っている。先生から、目には見えないバトンのようなものを引き継いできたように思う。それをまた、次に来る若者たちに伝えなければならないと思っている。

私は理学部文学科哲学教室というところで二年間、そのような先生と「一人一派の（自称）暴力学生たち」に出会えたという奇跡の中で生きていたのだと思っている。

「自分だけの悩みとするな。（相手のあることは）相手との対話を通して問題として解決せよ」

「人々は自分が考えているよりもはるかに自由なのである。そして、人々が自明で真理だと信じているものは、実は歴史の特定の時点に作りだされたものであり、普遍的なものでも絶対に正しいものでもない。この見かけの上での自明性は批判し、破壊すること、覆すことができるものである」

私は、理学部にいた時の二十倍くらいの時間を小児科医として過ごしてきてしまった。しかしながら、どういうわけか私の夢は今でもたった二年間しかいかなかったところにいつも帰っていくのである。